

# 『**T**HROW **D**OWN **C**ROWN』

—惑星フェリア・シリーズⅡ—

## ACT I 「出発前の準備」

「本当に一人で大丈夫か？」

「大丈夫だって、ほんとに心配性なんだから。」

あたしはスポーツバックに身の回り品をつめ込んでいる手を止めて、潤のほうに振り向いた。

「そんなに心配なら一緒に来ればいいのに……。」

「言っただろ。3D次元なんかに行ったら、試験が受けられないんだよ。」

そう、惑星クロスがある3D次元は、この地球のある3B次元よりゆっくりと時間が流れている。だから、向こうで一日滞在しただけで、地球では10日間が過ぎてしまう。この四月にようやく大学に戻った潤には、そんな余裕はとてもしゃないけど無かった。

「行かれるものなら俺だって行きたいんだよ。せめて、サーミンか祥典と一緒になら安心なんだが……。」

「駄目よ、あの二人は今が一番大事な時なのよ。連れていけないわ。」

「そりゃ、そうだが……。」

潤はしばらくブツブツ言いながら部屋の中を歩き回っていたけど、不意に何かを思いついたのか自分の部屋に戻っていった。あたしは準備に忙しくて、そんな潤には構ってられない。と、言っただって、持っていく物って、着替えが少しと潤が開発した電子スペクトラムカメラ。それなのに、どうしてこんな一生懸命に準備しているかと言うと、ようはお金の問題が絡んでいるからなのよ。

これからあたしが行くクロスという惑星では、タレントというお金が流通している。で、もちろんのこと、あたしはそんなお金を持っていないし、クロスに知り合いがいる訳でもない。ということで、潤が考えてくれたのが紹介状の山。

その昔、潤が転移装置の実験中にいろいろとお世話になった研究所が各地にあって、その研究所宛に書いてくれた紹介状。まあ、当てにはしていないけど、せっかくだから持っていこうと整理をしているの。これが、また意外とたくさんあって、きちんと数えてみると68通もある。あの、本当にそんなにあっちこっち行ったのかしら？

まあ、とにかく68通の紹介状に行く順番毎に整理してスポーツバックに押し込むと、あとはファスナーを閉めて一息ついた。

行ってしまったら、まず2ヶ月は帰ってこれないと思うんだよね。これは、あたしがかなり自由な職業だからできるんだけど、一応あたしの周囲にいる人には言うておかないとまずいかな。なんていったって、去年はそれでみんなに迷惑をかけちゃったからね。

潤の部屋に行ってみようかなあと立ち上がりかけた時、突然ドアをノックする音がした。潤ならまずそんなことをする筈がない。

「はあい……。」

ドアを開けるとそこにはメガネをかけた聖美が立っている。なんで聖美がここにいるの？と考え

る間もなく、そのまま部屋に飛び込んできた。

「レイコ！あんた、また蒸発するんですって？」

「ちょっと、聖美い……！」

あたしの部屋に飛び込んできたのは、あたしの親友の聖美。

「いったいどうしたっていうの。落ち着いてよ。今コーヒーでも入れるから。」

「だ、だ、だ……。」

まるでマシンガンのようにだだだを連発している聖美に、ちょうどさっき入れたばかりのサイフォンからお気に入りのマグカップに注ぎ、ミルクと砂糖をたっぷり入れた甘めのコーヒーを差し出した。

「聖美、落ち着いて。何が言いたいのか、ゆっくりはっきりと言ってちょうだい。」

コーヒーを一口飲んで少しは落ち着いたのか、マシンガンではなくなったようだけど、まだ少し興奮が残っているようで、ひときわ甲高い声で叫んだ。

「あんた、また訳の分からない場所へ行くんですって？」

「聖美、それどこで聞いたの？あたし、まだ誰にも言ってなかった筈なのに……。」

「何言ってんの、桂木さんが教えてくれたのよ。ね、悪いことは言わないから止めておきなさいって。ね、そうしなさい。」

「ちょっとお、どうしてそうなっちゃうのよ。潤が聖美にどう言ったかは知らないけど、あたしは雑誌の仕事で取材に行くだけなのよ。」

「だって、また変な機械を使って、別の次元に行くとかいう奴でしょ。」

駄目だ……。彼女は昔からそうだけど、自分の理解の外側にある物には決して近づこうとはしない性格なの。あたしがいくら説明したって、あたしが地球以外の惑星に行くことと、火星や金星などの未開の惑星に行くことが同義であると信じている彼女に、どう説明したって分かってもらえるとは思えない。たぶん彼女にとっては、クロスやフェリアは命に関わるような危険な場所ではないんだろうなあ。

「ね、聖美、あたしが今回行く所は、べつに危険な場所じゃないの。それなのに、あなたが知らない場所っていうだけで、そんな態度に出られると哀しいわ。あたしが旅行に行くことは、そんなにいけないことなの？」

あたしはゆっくり諭すように聖美に言ってやる。本当はマインドコントロールでもしちやえば簡単なんだけど、親友としてそれだけはやりたくないと思っている。

「だけど、親友に心配をかけることはいいことなのかい？」

不意にバリトンの声が部屋に響いた。その声を聞いた瞬間に回答を出し悩んでいた聖美の表情がパッと明るくなる。

「優ちゃん……！」

いつの間に入ってきたのか、優一さん……聖美の旦那さんが部屋の入口に立っている。

優一さんは、あたし達の高校時代の先輩で、あの当時校内の女の子なら誰でも一度はチョコレートを渡したんじゃないかというほどのいい男。頭脳明晰、スポーツ万能でスーパーマンみたいだった人。そういうあたしも優一さんに憧れていた一人で、もし聖美があたしに先に優一さんが好きだと言わなければ、あたしもラブレターの一通くらいは出していたかもしれない。ま、これは聖美の手前、誰にも言わないでいるけど。

その優一さんが並みいる女の子の中から聖美を選んでつき合い始めたのは高校を卒業してすぐのこと。そのまま交際が続いて、結婚話がトントントンと進んでいたところであたしが行方不明になったものだから、どうやら結婚式を延期していたらしい。結局は今年の11月にあたしがフェリアから帰ってきてすぐ、身内だけで小さな式を挙げた。

だからなのかな、彼女が必要以上に強く反対するのは、もうすぐ結婚という時期にあたしが半月も行方不明になって心配かけたから。

「でも、今回はちゃんとした取材旅行ですってば。」

「だったら、なんで黙って行くのよ。」

「べつに黙って行くつもりはなかったけどさ……。」

あ、でも、これは嘘だ。あたし、できることなら誰にも知られずに行くつもりだったもの。

「そうだ！ねえ、あたしも一緒に行く。優ちゃん、いいでしょ？」

「ちょっと、聖美い？」

良い訳はないじゃない。あんた、自分の身体のことを分かって言っているの？聖美のお腹の中には、今6ヶ月の赤ちゃんがいる。とてもじゃないけど簡単にいいわよなんて言える状況じゃないことは一目瞭然。

あたしが優一さんの顔を上目遣いに見ると、優一さんったら肩をすくめておどけるだけで、まったく聖美を止める気配はない。

「ねえ、いいでしょ。あたし、行くわよ。」

あわわわ、聖美ったら、すっかりその気になり始めている。

「駄目よ、駄目。あなた、自分の状況を分かっていないの？そんな身体でもしものことがあったらどうする気なの？」

「だって、レイコが一緒だもん。」

「だけど、転移装置だってまだ危険な代物だし、いくら都会とは言え初めてクロスへ行くのよ。何が起きるか分からない所なのよ。」

人が真剣に心配しているというのに、聖美ったらニヤニヤ笑ってどういうつもり？

「言ったわよ。もう取り消せないわよ。」

「なによ、急に……。」

ああ、そういうことか、ずるい……。あたしに危険だって言わせたかったんだ。

「諦めなよ。引っかかったレイコちゃんが悪いのさ。」

た、たしかに危険じゃないって言ったのを自分が否定しちゃったんだから……。まったく、優一さんはこの件に関しては完全に聖美の味方のようなね。まあ、潤が一番いけないんだけど。

「悪いけど、危険と言ったのは妊婦に対しての話し。だいたい、最初にも言ったけど取材で行くんだから、ある程度の危険は承知のうえよ。仕事のために行くのに、いくら親友の聖美が反対するからって、簡単に止める訳にはいかないわ。」

仕方が無いから真面目な顔で冷たく言い放つ。たぶん、こうでもしないと引き下がってくれそうにない。

「そう……。」

あーあ、やっぱり聖美を泣かしちゃった。こうなるとは思ったんだ。昔からのパターン。でも、今はそっと肩を抱いて慰めてくれる人が傍にいるから、あたしが心配するまでもなく大丈夫でしょ。

「よお、どうなったんだあ？」

まったく、潤ったらわざと頃合を見計らってこっちに来たんだわ。やけににやけた顔で近づいてきたので、思わず平手打ちを潤の左頬にくれてやる。

「まったく、子どもじみたことしかしないんだから。この程度で済んでありがたいと思ってよね。」

「痛いなあ。駄目だったのか。じゃあ、今度は裕章でも…。」

あたしがもう一度右手を振り上げると…。潤は慌てて部屋の入口まで逃げていく。

「わっ、冗談、冗談。ほら、これをやるから許せ。」

そう言って、あたしに何か小さい物をほうってよこした。両手で受け止めてよく見ると、なんと流星マークのバッジ。大ききの割りにはちょっと重い感じ。

「なによ、これ？」

「見ての通り、バッジだけど。」

「ただのバッジの筈はないでしょ。何を企んでいるの？」

「なんにも…。」

「ほんとに？」

「本当、本当。ただ、ちょっと通信機を埋め込んである。」

「通信機？」

やだ、どうりで重い訳だ。

「リンがそれを持っていてくれれば、こっちからの追跡がしやすくなるんだ。」

つまり、これを作るのに時間稼ぎがしたかったって訳ね。でも、今度は本当のことみたいだから許してあげるか。

まだ泣いている聖美の肩をそっと抱いてあげる。

「ね、なるべく早く帰ってくるからさ。あたしの帰りを待っていて。」

聖美は返事をしなかったけど、その代わりにあたしのことをギュッと抱き返してくれた。あたしは優一さんのほうに視線を移すと、優一さんはその名のごとく優しい表情で力強く頷いてくれる。

「じゃあ、聖美をよろしくお願いします。行ってきます。」

そっと聖美の身体を離して優一さんにほうへ押し出す。床に置いてあるスポーツバックを掴むと、潤を促して隣の部屋に行く。

転移装置、あれからかなり改良したんだそうだけど、まだ実験中であることには変わらないそうで、多少の不安定さは覚悟しないとイケないらしい。

「準備はもういいの？」

「ああ、すっかりとね。」

潤は複雑な装置をチェックしながらそう答える。

「じゃあ、あたし、行くわよ。」

「ああ…。」

ああ…って言ったってねえ。潤がスイッチを入れてくれなきゃ行けないじゃない。

「だから、行くってばあ。」

「ああ…。」

「あのねえ、いい加減にしてよ。男らしくないわよ。」

あたしもだんだんイライラしてくる。

「違うよ。転移先の座標設定が合わないんだよ。リン、ちょっと転移先がずれるかもしれないが大丈夫か？」

「それくらいなんとかするわ。大丈夫だからサッサとスイッチ入れてよ。」

この時、このちょっとがどれくらいなのか確認しておくべきだったんだけど、ついついイライラして訊くのを忘れてしまった。

「じゃあ、リン、気をつけて行ってこいよ。」

あ、本当にいきなりスイッチを入れないでよ。目の前がゆっくりと暗くなり、やがてすべての感覚が暗闇に飲み込まれていった。

## ACT I 「出発前の準備」

S60. 19. MAR <<H20. 23. MAR>>

## ACTⅡ 「ソルボレーヌ」

あたしがゆっくりと目を開くと、目の前には海が広がっていた。深い青というより、ちょっと緑がかった半透明な碧色といったところ。でも、不思議なくらいに静かで、海にしては波がないことに気がついた。

あたしは自分の周囲を見回してみた。ここは小高い丘の上で、足元には背の低い草が一面に生えている。正面には切り立った崖と海。後ろには真っ白い壁の大きな建物が見える。

建物か…、あれが最初に行く研究所なのかしら。あたしは足元に転がっているスポーツバックを拾い上げるとゆっくりとその建物に向かって歩き出した。近くまで来てみると、思ったほど大きな建物ではないことが分かる。まあ、六畳一間で転移装置を造っちゃう人もいるんだから、建物の規模で決めつける訳にはいかないだろうけど。

ソルボレーヌ研究所、古びた門柱にはそう書いてある。ソルボレーヌ？ちょっと待ってよお、潤から預かった68通の紹介状の中にソルボレーヌなんて名前はなかったわよお。やっぱり、転移先の座標がずれていたのかしら。参ったなあ、潤の知らない研究所じゃ、いきなり訪れてお世話になりますって訳にもいかないだろうし、かと言ってこんなところで野宿するのもご免だし。

あたしがどうするか決めかねて門前でウロウロしていたら、突然大きな声で怒鳴られてしまった。「コオラァ！わしの家に何の用じゃあ？」

「す、すみません…。」

うわあ、長い髭…。顎鬚が胸まで垂れ下がっている。

「すみませんではない、わしは何の用かと訊いておるんじゃ。」

「えっ、あの、道に迷いまして。もし、差し支えなかったら、休ませてもらえないかなあと思って…。」

精一杯の愛想笑いとともに、その年配の男性に頼んでみた。ここがどこなのかも分からないし、周囲に他に建物も見当たらないし、情報を得るためにもこのおじいさんに頼るしかない。

このおじいさんったら、あたしのことを頭のとっぺんから足のつま先までをまるで観察でもするかのようにジロジロと眺めると、ちょっと首をひねっておもむろにこう言った。

「おまえさん、妙な恰好をしておるようだが、もしかして地球から来たのか？」

「えっ？地球を知っているんですか？」

「やっぱりそうか。たしかおまえさんがここに来るのは来週だった筈だが…。まあ、来てしまったものは仕方ない。おそらくはウインももうすぐ帰ってくるだろうて、中で入って待っていればいい。」

「あたしがここに来ることを知っていたんですか？」

「ウインの頼みじゃ仕方ないしの。ついてくるがいいさ。」

あたしの問いにはてんで答える気はないらしい。そのおじいさんはサッサと中に入ってしまう。とりあえず何かの手違いはあるものの、どうやらここには来ることになっていたみたいだし、あたしを知っているかもしれないウインという人のことも気になるし、せっかくの招待だから招かれちゃいましょ。おじいさんの後について建物に入ると、意外なことに普通の家。クロスの普通がどういものかは言及しないことにしても、およそ研究所という雰囲気はこれっぽちもない。

「あのお、さっき表に研究所って書いてあったんですけど、ここは何を研究しているんですか？」

「まあ、じきに分かる。」

なんて無愛想なのかしら。こっちをチラッと見ないで、おじいさんは戸棚をゴトゴト動かしている。すると、戸棚の後ろの壁にポッカー穴が開いていて、そこには地下へ降りる階段までしっかりと出てきた。おじいさんは何か説明してくれる訳でもなく、一人で先にその階段を降りてしまった。

どうしようかなあ？と思いを悩んでいると、下からおじいさんの声が響いてくる。

「どうした、知りたいんじゃないのか？」

仕方が無いなあ。行かなきゃ埒があかないし、いざとなれば逃げるくらいはなんとかなるだろうし、思い切ってあたしはその穴に足を踏み入れた。その途端、あたしの後ろで戸棚が自動的に穴を塞ぐ。瞬間、足が止まったけど、すぐに意を決してそのまま階段を降りていった。地下の部屋は思った以上に広く、訳の分からない機械がさも意味ありげにそこに並んでいる。

「レイコくん、まあ、座りたまえ。」

「ええ…。」

でも、座りたまえなんて言われたって、この部屋には座れるような場所なんてないじゃない。部屋を見回して、ふと視線をおじいさんに戻すと、どこから出てきたのかいつの間にか丸椅子に座ってニコニコしている。

「あの…、椅子…。」

あたしが困っているのを見かねたのか、すぐ目の前にある赤いスイッチの付いた球体を指差した。

「そのスイッチを入れてごらん。」

ちょっと躊躇して、そして思い切ってそのスイッチを入れてみると、その球体はクルクルっと回り始め、見る見るうちに背もたれ付きの椅子になってしまった。

「あの…。」

「どうした、座らんのか？」

「え、いえ、座ります。」

参ったなあ、さっきからずーっとこのおじいさんのペースに乗せられっぱなし。こうして向かい合わせに座ったものの、どこから話しを切り出してよいやら見当もつかない。しかも、さっきまでの無愛想さはどっかにいっちゃったらしく、今度はやけにニコニコしていて、これはこれで恐ろしい気がしてきた。

「あの、どうしてあたしの名前を知っているのですか？なんか、あたしがここに来ることを知っていらしたようですけど…。」

「まあ、ウインから聞いておったのでな。たぶん、そうだろうと思ったまでだ。なんせ、こんな辺境の地に若い女子が一人で来ることなどあり得んからな。」

「ウインっていうのは？」

「わしの助手をやっておる男でな。素性はよく知らんがなかなか面白い男だ。もうすぐ帰ってくる頃だろうて。」

ちょっと待ってよ、クロスなんかにあたしのことを知っている人がいるなんてあり得ないわよね。潤だったらあり得ないけど、潤がここに来られるんならそもそもこんな面倒なことにはなっていない訳だし、潤の知り合いだったら68通の紹介状の中にある誰かということになる。いったい、あたしのことを知っている男の人って誰なんだ？

「ほら、ちょうど帰ってきたようだ。」

上のほうでゴトゴト音がして、次に階段を駆け下りてくる足音。

「ソルボレーヌ博士、やりましたよ。結構すんなり通りました。」

ん？あの声…まさか…。足が、身体が、顔が、次々とあたしの前に現れる。

「ラムダあ！」

「うわっ、なんでもう来てるんだ！？」

あたしが叫ぶのとラムダが驚くのがほぼ同時。

「あんた、なんでこんな所に…。」

驚いたあ、まさか、まさかよ、こんな所で行方不明になっていたラムダと再開するなんて思ってもみなかった。

「なんで…って、まさか、お宅は何も知らないでここに来た訳？」

「知らなかったって何をよ。」

「俺、フェリアから帰ってきてずーっとここにいたんだけど、シグマから聞いてなかった？」

「ぜーんぜん。」

潤は初めからあたしのことをラムダに任すつもりでいたんだ。あの後、あたしが何度もラムダの搜索をお願いしたのに乗り気じゃなかったのはそういう理由だったんだ。おかしいとは思ったのよ…。

「潤を信じたあたしが莫迦だったのよ。まったく、何が68通の紹介状よ。各地の研究所に紹介状を書いたから持っていけて、初めからラムダにお願いしてあったんでしょ？」

「たぶん、そうだろうね。ちなみに言うと、その68通の紹介状って奴も実は設計図だと思うよ。新型転移装置の設計図をお宅に預けるって連絡あったから。」

あー、だんだん頭に来た。あの人、初めからあたしのことをからかって遊んでいたんだ。聖美まで巻き込んで、いったいどういふつもりなのかしら。スポーツバックから68通の手紙の束を取り出すと、そのままラムダの手に押し付けた。

「ま、取材でこっちに来たんだろ。とにかく、ここにいる間のことは任せとけて。」

「ふん、ラムダなんか嫌いだよおだ。」

どうかと思ったけど、この行き場のない怒りを収めるには誰かに八つ当たりでもするしかないとばかりに、思いっきりラムダにあっかんべえをする。

「おいおい、それが24にもなった女のすることかよ。」

「なんで、あんたがあたしの年齢を知っているのよ。」

あたし、拗ねてやる。クロスに滞在している間、ずーっと拗ねてやる。

「ハアツ、ハツ、ハツ、ハツ…。よおし、気に入った。うん、よろしい。」

こんなことで気に入られても困るんだけど…。

「よし、ウイン、レイコを部屋に案内したまえ。わしはジュンの設計図を見せてもらおう。」

最初の頑固そうなイメージはどこへいっちゃったのって感じ。でも、いいわ、とりあえず行き場に困ることだけじゃなくなったみたいだから。こうなったら、おとなしく取材して、優雅に休養して、そして地球に帰ることにするわ。

「ま、ここではあたしのほうが分が悪いわ。お世話になるのはあたしなんだから、改めてよろしくね。」



「俺は初めから何も悪いことはしてないんだけどね。」

「恨むんなら、周りの人を引っ掻き回して遊んでいる潤を恨むのね。じゃあ、早く部屋に案内して。」

「ちえっ、損な役回り。」

ラムダはブツブツ言いながらも、今降りてきた階段を上っていく。さっきの戸棚のあった部屋に出るのかと思いきや、階段を上りきった所はガラスのドアだった。首をひねりつつ後ろを振り返ると、そこにはなぜかあたしがいる？

「わっ！」

思わず飛びのいてもう一度よく見ると、鏡の中のあたしがこっちを覗きこんでいるところだった。なんだ、でっかい鏡が出入り口になっていたのね。あれ、そうするとさっきの戸棚は？

「この階段は空間が複雑に交差しているのさ。あっちこっちにつながっているから、使いこなせれば便利だぜ。」

「ふーん。」

ん？なんで、ラムダ…。

「あんた、人の心、読んだわね。」

「なんだよ、いきなり。」

「とぼけたって駄目よ。今あたしが心の中で思った疑問に答えたじゃない。」

ラムダったらニヤついた顔でこう答えた。

「あのなあ、俺が能力を使えるのはフェリアだけだぜ。それに前にも言ったろ。お宅はすぐ顔に出るタイプなんだって。」

「えっ…。」

ちょうど目の前に鏡があるもんだから、思わず自分の顔をジーッと見てしまう。

「だけど、あたし、地球でだって能力を使えるもの。」

かなり言い訳がましいとは思いつつも反論せずにはいられない。

「そりゃ、お宅が元々そういう素質を持っていたからでしょうが。どっちにしても、勝手に心の中を見るなんてしないって。」

駄目だ、ちょっと自己嫌悪に陥ってきた。どう考えてもラムダのほうが正しい。たぶん、あたし、疲れているんだわ。正確な判断ができていないような気がしてきた。

ラムダは珍しくあたしがすぐおとなしくなったので、勝ち誇ったような得意げな顔を見せて、突き当りの一番奥のドアを開けて入った。

「ここがお宅の部屋。必要な物があったら俺に言えよ。それから…。」

「それから？」

「久々にお宅の怒った顔を見て気が付いたけど、うん、やっぱりお宅って可愛いよ。シグマみたいな朴念仁にはもったいない。」

ラムダは、あたしが投げつけたスポーツバックよりも素早く部屋の外へ出ている。どうしてそんな台詞を真顔で言えんのよ。

ああ、思いっきり疲れた。なんというか訳の分からない疲れだわね。潤がこんな莫迦なことしなきゃ、もっと楽だったような気がする。あたしはそのままベッドに寝転がった。窓からさっき丘から見た海が見える。ここの太陽はセレンと言って太陽系の太陽とほとんど変わらない。違いは、大きさがいくらか大きいかなってことくらい。

ちょうど正面の水平線にセレンが落ちていくのが見える。よく言えば夕陽の見える部屋。悪く言えば西日の差し込む最悪の部屋。ま、これからただでお世話になるんだし、あまり贅沢は言えないわよね。

海面が真っ赤に染まってキラキラ輝いている。少し風が出てきた感じで、あたしは暫く窓からこの風景を楽しんでいた。

## ACTⅡ 「ソルボレーヌ」

S60. 27. MAR <<H20. 23. MAR>>

## ACTⅢ 「国王の使い」

朝？小鳥の鳴き声かな。一気にベッドの中で跳ね起きてみる。

昨日、あのまんまジーツと夕陽なんかを見ていたんだよね。ほら、フェリアの時には夜がないなんてことがあったもんで、この惑星ではどんなことが起きるのかなという好奇心もあったし。でも、あたしの取り越し苦労だったみたいで、このクロスにはきちんと夜はあった。ただ、一つだけ困ったことがあるとすれば、ここの一日って長いよね。地球時間に換算すると240時間もある。つまり、地球の10倍。まあ、それは仕方ないとしても、どうやら完全に時差ぼけを起こしたらしい。

潤の話しによれば、通常はその惑星に行けばいくら地球と時間の流れが違ったとしても身体が合わせる筈だった。ただ、ごく稀に時差ぼけが起きると、体内時計は地球時間のままとになるので、身体が慣れるまでつらいことになる…と。

ということで、いくら寝ても朝になってくれないのよ。もう、こうして今度こそ朝だと期待を抱いて起きるの6回目よ。まったく、いい加減おかしくなってくる。あたしが夕陽に感動してから既に20時間以上は経っているような気がする。でも、ここでの時間だとまだ2時間しか経っていない計算になる。これ以上はいくらなんでも眠れっこない。ええい、こうなったらラムダを起こしちゃる。

あたしはベッドから勢いよく飛び降りると廊下へ出た。さあて、ラムダの部屋はどれだったっけ？やばいなあ、よく考えたらラムダの部屋は聞いていなかったような気がする。言っておくけど、あたしは方向音痴なんだってば。

悩んでいても埒があかないので、とにかく手近のドアから順番に開けていくことにした。薄暗い廊下を進んで最初に出てきた隣の部屋のドア。あたしは殊勝にも神に祈るとそーっとそのドアを開けた。

目の前には砂浜がずーっと広がっている。真っ白い砂、セレンもちゃんと出ていて、遠くの方では子ども達がかけっこをして遊んでいるのが見える。

あたしは黙ってドアを閉じた。最初のドアなんか期待したあたしが莫迦だったわ。もう、正解が出るまで開けまくるまでよ。その後、二つのドアを開けたけど、結果はどっちもハズレ。片方は草原で、もう一つは海、最初の砂浜と大差がない。

廊下の端まで来てこれが最後のドア。あたしの部屋から一番遠いドア。もうここまで来ると微塵の期待もなく、あたしはかなり乱暴に押し開けた。

人、人、人、ネオンサインがきらめく夜の街。まあ、砂浜や草原なんかよりましかな。あたしはついそう思って一歩足を踏み出してしまった。まるで、カジノかラスベガスを思わせるような街。酒場や賭博場らしきお店がズラッと並んでいる。まさか、クロスにこんな場所があるとは思わなかったわ。だけど、踏み出したはいいけど、結局のところこの後どうすればいいのかが分からなかった。よく考えたら、あたしはラムダの部屋を探していたんであって、べつに夜の街へ来たかった訳じゃない。第一、この惑星のお金を全然持っていないのに、こんな場所へ来てどうしようというのよ。

やっぱり戻ろうかと思って、後ろを振り向いてあたしは啞然とした。あたしの後ろにある筈のドアはもはや無かったのだ。いや、無いなんてもんじゃなく存在しえなかった。本当に何も無いのよ。つまり、あたしは広い道のど真ん中に突然放り出されてしまったのだった。

そういえば、さっき地下室から部屋に行く時も、ドアと思った場所が実は鏡だった訳で、空間が複雑に交差しているクロスでは当たり前のことかもしれないけど、方向音痴には一番向かない惑星かもしれないわね。

だけど、これで本格的に困った状況になったことも事実。これが勝手知ったる地球なら、アメリカだろうが北極だろうがなんとかなるんだろうけど、残念ながらここはクロスで私は下手に動くことすらできない。あたしは道の往来でいきなり考える羽目になった。実に邪魔ではあるけど、だいたい人は道の端の方を歩いていて、ど真ん中で突っ立っているあたしに気を止めようとも思わないらしい。

さあて、どうしよう？せめて、だいたいの方向と距離が分かればテレポートできるんだけど、とにかく何も分からないので余計に迷子になるのは目に見えている。

その時だった、ものすごい地響きとともに妙な形の車…たぶん車だろうと思われるもの、とにかく人が乗っている乗り物が歩いている人々を無視するかのよう突っ込んできた。ここへきて初めて気づいたんだけど、こんな広い、こんな整備の行き届いている道路で、今まで車が一台も通らなかったのが不思議なくらいで、この歩行者天国のような状態が異質に思えてきた。よく周囲を見回してみれば、電柱、信号や道路標識などは一切見当たらない。

とすれば、あの車みたいなのがこの道路に入ってきたことは、ここの人達にとっては非常に珍しいことなのかもしれないわね。見ていると、みんな悲鳴をあげて逃げ回っている。そのうちに道路の真ん中にあるのは、あたしとその妙な車みたいなものだけになってしまった。車はそれほどスピードは出ていないものの、一直線にあたしに向かって突っ込んでくる。それを周りで見ている人達は口々に逃げろと叫んでいるけど、どうしたものかしらね。

爆音の割にはまだ距離はあるし、スピードもそんなに速くなくさそうなので、避けようと思えば余裕で避けられるんだけど、今このポジションを失ったらおそらくわたしは本格的に迷子になってしまう気がする。やっぱり、ここで下手に動く訳にはいかないかな。

あと200メートル、100、50と迫ってきて、向こうもこっちには気づいている筈なのに避けようという気配がない。真っ直ぐとあたしの立っているところを目指してやってくる。その時、群集の中から一人の男性が、逃げろと叫びながら走ってきた。あたしを助けるつもりみたいだけど、あの人がここに来る方がかえって危ないんだけどな。

仕方がないな。できるだけ人前で能力は使わない気でいたけど、そんなことも言っていられる雰囲気ないし。誰の目にも危ないと思えたその瞬間、あたしはその車を持ち上げていた。運転席に座っている人にとっては信じられないことが起きたように思ってるだろうなあ。たかだか、普通の女の子がたった片手で走ってきた車を強引に止めちゃったんだから。

「あ…、あの、大丈夫です…よね？」

あたしを助けようと飛び出してきてくれた男性が呆然と立ち尽くしている。この人にも悪いことしちゃったみたい。もちろん、道路の両側からこの成り行きをずーっと見ていた何百人という人達にとっても…。

「そこの娘！なんということをするのだ。離せ！離さんか！」

こんな無謀な運転をするから若い人かと思っていいたら、運転をしていたのは意外とおじいさんだった。鼻の下に立派な口髭をたくわえて、まあ、見るからに頑固そう。

「わしは先を急いでおるのだ。こんな所で道草をしとる場合ではない。早く離せ。」

このおじいさん、あたしをひき殺そうとした事実を無視して怒鳴りつける。と、その時ようやくあたしを助けに来た人が精神的に立ち直ったのか、つかつかと車に近づいてきた。

「あんた、いくらよそ者と言ったって、この街は乗り物を使えないことくらい知っているだろう。」

「ふん、そんなもん知らんわい。わしは急いでおると言ったではないか。」

「いくら急いでいるって言ったってなあ。一步間違えれば、このお嬢さんを殺すところだったんだぜ。まずは謝るのが筋じゃないのか？」

「なにおう、わしを誰だと思っておるのだ…。」

おじいさんが車から身を乗り出して名乗ろうとした瞬間、その言葉は何百という群集の叫びにかき消された。この様子を見ていた人々が一斉に謝れと叫び出したのだ。さすがにこのおじいさんも迫力に押されたのか、あとの言葉が言えずにちょっとたじろいでいる。

「ぬうう…。」

「おい、謝らないか。」

群集が味方をしてくれたので気が強くなったのか、さっきよりかなり強い口調になっている。

「す、すまん…。」

蚊の鳴くような小さな声をやっと絞り出す。

「なんだとお、もっと早く言え。」

あーあ、この人、完全に調子に乗ってしまったわ。こうなってくると、おじいさんの方が少し可愛そうになってくる。

「ええい、すまんと言っておるだろう。とにかく、わしは先を急いでおるのだ。もう離してくれ。」

半分くらい泣き声になっている。あたしはちょっと横へどいて、車を止めていた手を離してあげた。車らしきものは再び唸り声をあげて走り去っていく。

「まったく、なんて奴だ。あれでも謝ったつもりなのかよ。」

男の人は走り去っていく車に向かってブツブツ文句を言いながら、あたしに近づいてきた。

「大丈夫ですか？最近はおあいう変なよそ者が増えまして困ったもんです。」

群集は歓声をあげながらあたしの周りに集まってきた。

「ええ、まあ…。」

悪い人じゃないんだろうけど、なんとなく好きになれそうにないタイプ。

「お嬢さん、よかったら気分治しにお茶でもいかがですか？」

「ありがとうございます。でも、大丈夫ですから。」

ちょっとばかり心の中が見えてくる。いわゆる下心というのか、自分がいい格好したかったというのもあるみたい。

「まあまあ、こんなことになって、あなたはかなり参っているようだ。私が良いお店を紹介しますから、ぜひご一緒して下さい。」

こんなやりとりになって、集まっていた群衆も少しずつ散らばっていく。

「ごめんなさい。本当にもう大丈夫ですから。」

そろそろ、周囲からクスクス笑いが聞こえるようになって、格好つけようとしていたのが裏目に出たことに気がついたみたい。男の顔に露骨に不満の色が浮かび上がってくる。

「さあ、すぐそこですよ。お時間は取らせませんから行きましょう。」

仕方が無いなあ。それ相応のあしらい方をするしかないかな。

「申し訳ないけど、あたしはいまここから動きたくないんです。助けてもらってありがとうございました。だから、あなたもどうぞ行って下さい。」

「お嬢さん、私の誘いをそう無下に断るものじゃありませんよ。」

おっ、あくまでもそういう態度でくる気なのか。今回は最後までおとなし目でいきたいんだけどなあ。

「そうですね。でも、あたしにも好みというのがありますて、どうせ誘われるならもう少し良い男性と行きたいかな…なんてね。」

あからさまに顔がひきつっているのが分かる。この人、今まで女性にこうやって断られたことがなかったんでしょね。相手が悪かったと思ってむこうに行ってくれると助かるんだけど。

「つまり、あなたってあたしの好みじゃないんだ。」

「な、なんだとお…。」

見る見るうちに顔が真っ赤に変わっていく。男は一瞬にして凶暴な顔つきになって迫ってきた。

「おとなしくしていればいい気になりやがって、この怪力女！」

あら、やっぱり怪力に見えたかしら。だけど、言うに事欠いて怪力女はないじゃない。ちょっとひどすぎるよね。

面倒だからその辺にぶん投げてやろうかと精神を集中し始めた途端、男のすぐ後ろの空間がパカッと開いた。

「それに、その子にやちゃんとナイト様がついているんだ。おまえさんは用なしだと。」

あー、ラムダ！男の尻を蹴っ飛ばしながら、道の真ん中に突然できたドアから出てくる。蹴っ飛ばされた男は、ひとしきり悪口雑言を喚いていたけど、ラムダがもう一度睨みつけると転がるように逃げていった。

「それにしても、ナイトより強いお姫さまだけどね。クッククツツ…。」

なによお、その笑い方。ラムダがちゃんとドアのことを説明しておいてくれりゃ、こんなことにはならなかったんだからね。

「いつまで笑っているのよ。さっきまでは真剣に迷子になったと思って悩んでいたんだからね。」

「ん、悪かった。最初に話しておくべきだったのかもしれないけど、昨日は俺の言うことをおとなしく聞くような雰囲気じゃなかったでしょ。ま、貴重な体験をしたと思えばいいさ。」

なあにが貴重な体験よ。よく言うわね。

「で、お姫さまとしては、どうせ部屋に戻ってもおとなしくする気なんて無いようだから、ついでにこの街ナイトルを案内するよ。」

ニヤッと笑ってそう言うと、あたしが答えるのも待たずに勝手に歩き出す。仕方がないし、ラムダの言うことはほとんど当たっているし、気に入らないけどついていくしかないじゃない。

「この街はさ、よそ者の街なんだ。クロス之夜は長いからね。時間の感覚がずれている奴は、みんなここに集まってくるのさ。ここだったら240時間いつでも騒げる。」

なるほどねえ、つまりあたしみたいに眠れない人が集まっている街なのね。

「あれ？じゃあ、この街の人はみんなクロス人じゃないの？」

「まあ、何人かはいるだろうけど、普通のクロス人ならこの時間は寝ている時間だからね。」

そう言ったラムダの顔が少し曇る。あたしの表情が分かりやすいつて言うなら、ラムダだってそれは同じ。こういう時はたぶん何かを隠している顔。

「そう疑うような顔するなって、おいおい全部話すからさ。そうだ、せっかくだからフラットランドにでも行くか。あそこだったら、いろいろ面白いものもあるし。」

「なによ、そのフラットランドって？」

まあ、一応はラムダの言葉を信じてそれ以上は追求するのをやめておく。どうもラムダだけは心の中が読めないから、彼が話してくれない以上はどうやっても無理だろう。

「まあ、地球で言うところの遊園地みたいなもんさ。」

ラムダはあたしの腕を半ば強引に掴むと、左手につけている二次元プリンターのスイッチを入れた。お馴染みの幾何学模様が目の前に広がって、気がついたら目の前の風景が繁華街から裏通りの薄暗いところへ変わった。

「ラムダあ、このどこが遊園地なの？」

「ここは単に入口なの。クロス空間は独特のねじれ方をしているから、見た目と中身が一致しないということはよくあるのさ。」

ラムダは小汚いドアを押し開けてあたしを促した。

入ったところは一転して光に溢れている。まるで光の洪水。何よ、これ？

「ここからフラットランドが始まるのさ。まずはフルライトゾーン。続いてタイムスケールゾーン。」

ラムダの言葉に反応したかのように光が消えて、代わりに無数のあたしがそこに現れた。しかも、子どもの頃のあたしから年老いた姿のあたしまでいる。たくさんのあたしがこっちを見ているんだけど、ただ一人として同じあたしはいないみたい。

「そうだな、次は当フラットランドの最大の呼び物、ロケットコースターに乗ろう。」

「ロケットコースター？」

「いわゆるジェットコースターみたいなもんさ。おいで……。」

なんかラムダに違和感を感じる。何だろう……。まあ、あたしより楽しんじゃっているのは分かるんだけど、何かがさっきからおかしい。

今度の場所は空間というより普通の遊園地の雰囲気。食べ物を売っているお店やベンチなんかがあって、けっこうな人がそこで楽しんでいる。そして、ラムダが指差した先には長蛇の列。まさか、あれに並ぶのかな。

「ロケットコースターは人気があるんだ。あれくらいの人数じゃ、まだまだ少ない方だよ。」

あたしが露骨に嫌そうな顔をしたのに気がついたのか、ラムダは慌ててとりつくろうように説明してくれたけど、あたしっておとなしく長い時間並ぶのってできない性質なんだ。どうしたってイライラしてくるのは目に見えている。悪いけど、こりゃパスだわ。

「ねえ、ラムダあ、どうしても、これ、乗りたい？」

「どうもお気に召さなかったみたい……なのかな？」

見ていて分かるほどガッカリしているラムダ。なんか悪いことしちゃったなあと思い、なんか言い訳しようと思った瞬間、何かがあたしの中で警告を発した。何かが来る？

ラムダも同時に何かを感じたようで、二人して身構えた時には既に白地に赤いラインの入った制服を着た一団があたし達を囲っていた。手にはみんな銃らしき物を持っていて、銃口はしっかりとあたし達に向けられている。ただ、殺意はないようで何が目的なのかは分からない。

「あんた達、何の用よ。なんで銃をつきつけられないとならないのよ。」

しかし、誰も答えない。答えないというより何も考えていない。べつにシールドをしている訳ではないのに、心の中を見ても何も読み取るものがない。

「ラムダ、この人たち本当に人間なの？思考が読み取れない。」

「まあ、そういうふう訓練されているんだろうな。」

その時、地が唸るような響きとともにどこかで見たような妙な形をした車がこっちへやって来るのが見えた。

「なあ、せっかくの休養が潰れるかもしれないけど勤弁な。」

ラムダがボソッとあたしの耳元で囁いた。ラムダにはこの一団が何者なのか分かっているの？

車は大きな音をたてて、あたし達の目の前で停止した。制服姿の男達は銃を下げてパッと散っていく。そこへ車から降りてきたのは、やっぱりさっきの頑固そうなおじいさんだ。ラムダの姿を見つけたら、大声で叫びながら駆け寄ってきた。

「ウイン様、ようやく捕まえましたぞ。さあ、わしと一緒に城に戻ってまいりますぞ。」

ラムダをと見ていると、肩をすくめて首を横に振っている。

「さあ、早く私の車にお乗り下さい。」

肩で息をしながらラムダに近づくと、腕をとって引っ張っていかうとするが、それを何の苦もなくひょいと軽い動作で振り払う。

「じい、久しぶりに会ったというのに、相変わらずせっかちな性格は直っていないな。」

「何を仰いますか。久しぶりなのは誰のせいだと…。今日こそは何があっても城に来てもらいます。さもなくば、じいはこの場で…。」

そう言うが早いか、おじいさんは上着の内ポケットから銃を取り出し、自分のこめかみに当ててみせた。やだ…。まさか自分の命をかける気なの？

「この場で…なんだい？その銃で死ぬるものならやってみたほうがいい。」

「ラムダあ、何てことを言うのよ。本当に死んだらどおすんのよ。」

「大丈夫だよ。まあ、見てなって…。」

は、薄情者…。まさか、ラムダがこんな台詞を笑いながら言うとは思わなかったわ。

あたしはおじいさんの手の中にあるその銃を取り上げた。おじいさんは驚いて顔を上げたけど、まだ訳が分からないという顔をしている。そして、ようやくあたしの存在に気づいてくれたみたい。

「お、おまえはさっきの小娘…。」

心なしかおじいさんの顔がひきつっているようにも見える。まあ、無理もないか…。

「なんだ、じい、知っているのか？」

「知っているなんてもんじゃありませんぞ。素手で走っているブランベル号を止めた怪力女です。ウイン様、そんな小娘に近づいてはなりません。」

あたしからラムダを遠ざけようと腕を引っ張るが、またしてもひょいと振り払われ、おじいさんは慥然とした表情になる。

「じいも伝説の少女の名は知っているだろう？」

「知っているだろうとは何ということ。伝説の少女の話はウイン様が幼少のみぎりに私めがお話し差し上げたものです。たしか、リユース・フラウという名でありました。」

「そうだ、リユース・フラウ、それが彼女の名だ。」

「えっ？」



おじいさんは驚いたようにあたしのことを頭のとっぺんから足のつま先まで、まるで舐めるようにして見つめると、急に顔つきが変わった。

「すると、この小娘…いえ、このお嬢さまが、あのトリプタンを倒したのでございますか？」

「そうだ、こいつの能力はもう見たんだろう？」

「そりゃ、もう…、はっきりと…。」

さっきと打って変わった態度であたしのことを感心してくれて、なんとなくこの場の雰囲気がおかしくなってきた。その時、さっきの制服の人が一人、おじいさんに近寄ってくるとなにやら耳打ちをして、またすぐに消えてしまった。すると、急におじいさんの表情が陰しくなり、さっきよりもかなり強い口調でラムダに向かって言った。

「ウイン様、城にお帰り下さいませ。国王のお命はそう長くはございません。万が一の場合は、ウイン様に国王の位をついで貰わねばなりません。」

「ちょっと待て。兄貴達はどうかんだ。」

「ご長男のメルリアン様をはじめ、クラウナー様、スライン様、テロール様とも全員まだ行方知れずでございます。はっきりとご存命が確認できているのは、あの時ラムダにおられなかった国王様とウイン様だけなのです。」

ん？なんか頭の中がこんがらがってきた。

「あのお、ちょっと口を挟んで申し訳ないんだけど、お宅って一体何者な訳？ラムダっていうのは地名なの？」

このおじいさんの話しを聞く限りでは、ラムダの本当の名前はウインということらしいけど、まさかどこぞの国の王子様な訳？でもねえ…。

「そうだな、ここまで聞いてしまっただけで、今さら隠しても仕方がないし、すべてを説明するよ。」

なんとなく、あの一年前のフェリアでのやり取りを思い出しちゃった。あたしが出身地を訊いた時のとても哀しいラムダの瞳を…。

「とりあえず城へ行くとして、話しはアルテミスの中ということでもいいかな？」

今ここで話しているラムダの瞳はあの時ほどの哀しみは感じられない。だけど、やっぱり何か暗い影を背負っているような気がしてならない。

「じい、俺はアルテミスで行くが、じいはどうする？」

「大丈夫でございます。宇宙港に船を待機させてありますゆえ、すぐに追いつけることでしょう。」

おじいさんは、ラムダに向かって深々とお辞儀をすると、またあのすごい音のする車に乗って行ってしまった。頑固なだけに見えたけど、礼儀正しさは完璧かもしれない。

「さあて、じゃあ、俺達も行くか。」

ラムダは二次元プリンターを作動させてアルテミスを出すと、あたしの方にそっと手を差し出した。

「さあ、お嬢さま、どうぞ。」

あのねえ…。まあ、悪い気はしないけどねえ。ふざけている時ならともかく、今の状況を考えてみると…らしくないんだよね。でも、せつかくなのでラムダのエスコートでアルテミスに乗り込む。すぐにラムダは運転席に就くと、もう普段のラムダの顔になっている。

あっと思う間もなく飛び上がると、もう宇宙空間に出ていた。

「まず、どこから話すか…。」

「そうねえ、やっぱりお宅の正体からかな。」

「うん、そうだな。俺はここから数10光年離れた惑星ラムダの第5王子で、名前をウイン・アクサリ・ラムダと言うんだ。」

ウイン・アクサリ・ラムダ…か。

「2ヵ月半前、地球時間に直すと約2年前のことだが、トリプタンが無理に動いて次元の裂け目を作ったことがあった。ラムダはその裂け目に飲み込まれたんだ。俺はちょうどその時地球にいて難を逃れたんだが、ラムダ上にいた兄貴達はどうかやら一緒に飲み込まれたらしいんだ。」

それでか、前に言いたがらなかったのは…。

「じゃあ、これから向かうお城っていうのはどこにあるのよ？」

「ああ、ラムダには13の衛星があって、それぞれ公家が独自の自治区を治めているんだ。ラムダが飲み込まれた時に5つほど巻き込まれたんだが、まだ残っている8つの衛星の中にうちの自治区があって、城はそこにあるんだよ。」

さっき感じた違和感の謎も同時に解けた気がする。ウインってやけに地球のことに詳しいのよ。さっき、地球にいたことがあると言ったわよね。彼の台詞の中に今まで普通に地球でしか分からない言葉が混ざっていること。そこがあたしの感じていた違和感だったんだ。

「でさあ、ちょっと頼みがあるんだな。」

「なあに？」

こっちを向いたウインの顔がけっこう真面目で、こっちもなんとなくドキドキしてしまう。

「俺ってどう考えても国王って柄じゃないだろ。実際さあ、性格的にああいう生活は合わないんだよ。だから、この話しをぶち壊したい訳。申し訳ないんだけど協力してくれないかな。」

「まあ、いいけどね。でも、お宅がもし王位を継がないとなると国はどうなる訳？それを訊いておかないと…。」

ぶち壊すだけ壊しておいて、あとは知りませんじゃあまりにも無責任すぎる。

「さっきも言ったけど、各衛星には自治区を持った公家がある。王家というのはそのうちから一つだけ選ばれた家のことなんだ。もし、俺が王位を継がなければ、残りの公家から新しい王家が選ばれるだけさ。」

「ふーん、で、お宅はそれでいいの？」

「兄貴がいりゃともかく、俺が国王なんてやれる柄じゃないさ。じゃ、そういうことで、よろしく頼むわ。」

ま、とりあえず頼まれましょ。ただし、様子を見ながらね。だって、こんな面白そうな展開、いい小説のネタになるもの。黙って見ているだけじゃつまんない。

前方に不自然な並びで8つの衛星が見えてきた。あれがウインの生まれ故郷かあ。なんとなく一波乱ありそうな予感にワクワクしている自分がいるのに気がついた。

### ACTⅢ 「国王の使い」

S60. 22. APR <<H20. 1. APR>>

## ACTⅣ 「パウダーの床屋さん」

アクサライト、惑星ラムダの元第四衛星。空気、水、緑、生物、すべて地球型。はっきり言って不満が出るような理由ってこれっぽちもないと思う。街はきれいに整備されていて、交通機関も発達しているし、その上治安もとてもいい。それに、なって言ったら、ここに住んでいる人々は明るくて気のいい人ばかり。まるで善意の固まりって感じの人たちばかり。

これが、あたしがこの衛星についてわずか15分ほどの感想。そうなのよ、それって実はあんまりなのよ。人間って、良い人もいて、悪い人もいて…。ううん、どう表現すればいいのか困るんだけど、十人十色って言葉もあるように、10人の人がいたら10通りの考え方がある筈で、だからこそ社会が形成されるんだとあたしは思う。

ところが、この星の人たちってみんなそうなのか、会う人はみんなあたし達に対して同じ反応しかない。ある意味、とっても不自然な人達としか言いようがない。

まずはスペースポート。着陸する時に身元照会をするので、ウインの素性がばれてしまった訳。そうしたら、もうスペースポートは上へ下への大騒ぎになっちゃって、やれ王子様万歳だの、プリンス・ウインだのの垂れ幕があっちこっちに掲げられていた。素直に着陸するつもりだったんだけど、こうなると降りるに降りれなくなり、仕方なしに短距離転移でスペースポートから少し離れた場所に降りることにした。

そうしたら、今度は報道陣が詰めかけて来て、言っておくけど日本でだってあんなマスコミの数は見たことないってくらいのレポーターやらカメラマンやらがあたし達を取り囲む有様。それをやっとの思いでかき分けて表通りに出たら、市民がみんなあたし達の姿を見るとお辞儀をするのよ。一人くらい無関心がいてもいいんじゃないかといふ余計な心配をしてしまうくらい。いったい、この人達はどうなってんのかしら。

結局、都市の中心部にあるアクサリ家の別荘に行く為には、ウインの二次元プリンターを使って連続単距離転移をするしかなかった。おかげで目の前の螺旋模様の残像がうっとおしいたらありやしない。

そして、あたし達はついに別荘の正門の前に立っていた。分かるかなあ、正門があるということは、裏門っていうのもあって、もしかすると西門とか東門とかいうのもあるかもしれないと、とにかく別荘という言葉に騙されてはいけないと自分自身に言い聞かせなくてはいけなかった。およそ、あたしが考えていた建物とはまったく規模が違うということだけはよおく分かった。つまり、あのおじいさんが言っていた通り、お城そのものなのよ。

「ちょっと、これって…。」

「なに？あぁ…。何者にも負けない能力を持っているというのに、こんな城一つに怖気ついてんのかよ。」

「だってえ、こう王族なんて言われると、つい気後れが…。」

「大丈夫さ、俺と一緒にんだから。」

ポンとあたしの頭に手を置いて髪の毛をクシャッと撫でる。でもねえ、お宅のその言葉が素直に信じられるくらいなら、ここまで来る間だって何事も起きなかったんじゃないかなって思うんだけど。ウインの場合は、なぜかしら心が読めないから余計に疑り深くなってしまふんだよね。

「とにかく、今さら逃げる訳にもいかないし、俺はお宅を頼りにしてんだからうまくやってくれ

よ。」

「はい、はい……。」

なあんか、気が重くなってきた。こういう時ってあんまり良いことないんだよねえ。

「おーい、門番、じいにウインが着いたと知らせてくれ。」

巨大な門の上、そうねえ、高さにしてビルの3階分くらいの高さの所に門番らしき人物が二人いて、あたし達を見下ろすようにこっちを見ている。ウインはその左にいる門番に声をかけたのだけど、その門番は聞こえている筈なのにウンともスンとも返事をせず、ただ黙ってこっちを見下ろしているだけ。

「おーい、聞こえないのか。第五王子のウインだ。この門を開けろ！」

今度はさっきより大声で語尾もいくらかきつい言い方になっている。だけど、それでも門番は返事をしなかった。ただ、さっきと違うのは、この二人の門番は何やら相談を始めたのだった。時折、あたし達のほうを見ながら、何度か頷いている姿が見える。そして、二人のうちの最初に左側にいた門番が下まで降りてきた。

門番は覗き窓のようになっているところから顔だけ突き出して、もう一度あたし達を確認するようにジロジロと見るとおもむろに言った。

「この城はバライナ家によって占拠されています。ウイン様、早くお逃げ下さいませ。」

門番はどちらかというとも早くあっちへ行ってくれと言わんばかりの態度だった。

「何があったんだ？じいはどうした？国王は無事なのか？」

「国王様は無事です。グランシーノス様はまだ戻られていません。さあ、早く、バライナの者に見つかります。」

門番はそれだけ言うと、それで覗き窓をピシャッと閉めてしまった。

「なんかあたし達の知らないところで勝手に話しが進んでいるみたいね。これから、どうすんの？」

「どうするもこうするも、とにかく城には入れないし、街に戻るしかないだろう。」

で、結局はまた街に戻ることになる。今度は歩いて引き返すことにしたんだけど、このままじゃまずいだろうということで、ちょいと変装などをする。まあ、変装と言ったって、上着を変えてサングラスと帽子くらいなものだけど、それにしても何でも取り出せる二次元プリンターって本当に便利ね。

街の中ではバライナの兵士が市民を制圧しており、さっきまでと雰囲気は随分と違っていた。

「それにしても、バライナ家がアクサライトから出ることを禁じたのはラッキーだったな。とりあえず、俺達はけっこう自由に動き回れるって訳だ。」

本当にそうなのかしら？ウインがここに来たのはもう知られている筈。狙いがウインだとしたら、アクサライトから出ることを規制しているのは、ウインに出ていかれては困る理由があるからなんじゃないのかな。

「このまま歩き回る気？どこか休める所はないの？あたし、睡眠不足と時差ぼけで、そろそろ限界なんだけど……。」

さっきまではお城を間近に見て緊張していたこともあって気づかなかったけど、まだ時差ぼけは完全に直っていないようで急に疲れが身体にのしかかってきた。次回は潤に何か対策を考えてもらわないと駄目ね。

「そうだなあ……。ん、待てよ。そうか、そう言えば一番危険で安全な場所があった。」

「何よ、それ？」

「次元管理局。そこが無事なら間違いなく俺達をかくまってくれるさ。」

次元管理局のことなら少しは潤から聞いたけど、かなり大きな組織だと聞いた覚えがある。すべての三次元空間を管理していて、もちろん地球にも支部がある筈だと…。そうか、ウインはそれで地球に来たこともあるのか。

急に早足で歩き出したウインを追って、あたしは慌てて小走りで追いかける。道にはおそらくは普段と変わりなく人々が往来していて、よそからの侵略を受けているという雰囲気は微塵もない。ただ、所々に武器を持っているバライナ家の兵士が立っていて、それが異様と言えれば異様な感じがする。

15分くらい歩いたのか、既に街の中心部からは少し離れて、どちらかという住宅街とも言える雰囲気のある場所に来ていた。

「ちょっと、こんな場所に本当にあるの？」

「うん、この辺りは辺境だからね。金もあまりないし、土地の安い所に作ろうとすると、こういう場所になるんだろうな。」

自分の故郷を辺境なんて言っちゃっていいの？それにしたって、一応この次元ではその名を知らない者はいないくらいの組織なんですよ。もうちょっとましな場所に建物を建ててもいいと思うんだけど。

「不便じゃないの？」

「そりゃあね、こんな端のほうの衛星じゃあ、せいぜい苦情処理くらいしかすることはないからね。実際の機能を持っているのはクロスにある本部だけなんだよ。」

「そういうものなの？」

「そういうもんなのさ。さあ、着いたぜ。」

へ？着いたって言われても…、これってどう見ても理髪店にしか見えない。

「驚いたろ？」

ウインの悪戯っぽい目。

「これが、あの次元管理局なの？」

「そうさ。」

あのって言うところを特に強調してみたけど、たぶんあたしが言わんとしていることは先に読まれている。というか、あたし、たぶん期待通りの反応をしているね。

「次元管理局、ノビ星系支部の中にあるラムダ地区担当局のそのまたアクサライト出張所というのが正式名称。で、通称は…。」

「パウダーの床屋さん…ってな。お嬢さん、今ならカットを格安にしておくけどどうだい？」

あたし達の背後から突然野太い声が響いて振り向いてみると、ちょっと小太りの前髪の後退したおじさんがニヤついて立っていた。

「パウダー！久しぶりだなあ。まだ、こんな辺境にいるとは思わなかったぜ。」

「なあに、俺は床屋が好きだけさ。まあ、入りな。どうせ、今日あたりは客なんざいないし。」

「今日も…だろ？」

ちょっと呆気に取られてしまった。パウダーさんとウインはいきなり肩なんか抱き合っと思ったら、あたしのことなんかで目に入らないって感じでその床屋の中に入っていった。ど

うも、ウインの知り合ってまともな人がいない気がする。

あたしだけ外に立って床屋の看板を眺めていても仕方がないんで、ドアを押して中に入る。と、入った途端に今入ってきたドアは消えてなくなった。ガラス製の押し引きドアだったのに、今はただの壁になっている。まあ、これくらいのことでは、もういちいち驚くのは莫迦らしくなってきたけどね。ただ、先に入っていった筈の二人が見当たらないんだよね。

「お二人さーん。ちょっと、どこ行ったのー。」

グルッと部屋を見回して、ここがどこかに似ていることに気が付いた。いや、正確にはどんどん似ていくことに気が付いた。この部屋は少しずつだけ形を変えている。なんとなく、そのままポーンと眺めていたら、やがて部屋の動きは停まって、床屋だったろう部屋はまるで作戦室のような部屋になった。そうだ、何に似ているかという、ゼウス基地のメインルームにそっくりなんだ。

ウーンという機械音が響いて、壁の一部が動いてドアになった。

「なかなかのもんだろ、こんな辺境でも設備は最新のものを揃えたんだぜ。」

「まあな、だが、何のためにこんなものをアクサライトに置いとくんだ？」

「そりゃ、単なる趣味さ。」

いつの間にか二人ともしっかりと次元管理局の制服に着替えている。青味がかかったグレーに銀の模様と金の模様。潤が何かの役に立つからと見せてくれたデータと同じ模様。

「ところで、そちらのお嬢さんは紹介して貰えるんだろうな？」

「ああ、そうか、忘れてた。この子は森柄鈴子、地球人なんだが、これでも能力保持者でね。怒らずと恐いから気をつけろよ。」

忘れてって…。まったく、どうせ、あたしの性格は過激でしょうよ。でも、いったい誰が火を付けたと思っているのかしら。

「この子が例の…。なるほど、惑星一個くらいは壊しそうだ。」

例の…という言い方をするということは、さっきのグランシーノスさんとのお話といい、どうやら私とトリプタンのことは全部伝わっているみたいね。でも、どこから惑星一個という話になっているのよ。

「そんなに壊せませんよ。せいぜい床屋が一軒ってところですね。」

いい加減にしておきなさいよお。あたしをネタに二人して遊ぶつもりなのかもしれないけど、あたしはおとなしく遊ばれてあげるつもりなんかはこれっぽちもないんだから。

「そりゃあいい。あんたとはうまくやっていけそうだ。俺の名はパウダー・セントスって言うんだ。こいつとは同期でね。もっとも、俺はこいつみたいにエリートコースにや乗れなかったから、こんな辺境の衛星にばかりいるが、電子工学についちゃあ、ちょっと自信があるんだぜ。」

ふーん、少おし鼻の頭を真っ赤にして、瞳を輝かせながら自慢するなんて、ちょっと少年時代の面影がそのままって感じもあって、なんとなく悪くはない。

パウダーがパチンと指を鳴らすと床から椅子が出てきて壁からテーブルが出てくる。なるほど、得意な電子工学を生かすことができるのね。テーブルの上には、しっかりとグラスが3つ、それぞれ見たこともない緑色の液体が入っている。パウダーはそのうちの2つを取って一つを私に渡すと、ちょっと格好をつけてこう言った。

「それじゃ、旧友との再会と新しい出会いを祝して乾杯！」

パウダーは一気にグラスを飲み干す。ウインは少し躊躇するような仕草を見せたが、やっぱり一

気に飲み干した。

あたしはというと、ちょっと決心がつきかねて、グラスを目の高さまで持ち上げてこの液体が何なのか探ろうとしていた。べつにお酒が苦手って訳でもないからいいんだけど、それにしてもウインのさっきの仕草が妙に気にかかる。

「毒なんかは入ってないから、一気にどうぞ。」

うーん、こう言われちゃあ仕方がない……。

あたしは二人が注目する中、一息でグラスの中身を飲み干した。

ぐっ……、うわ……、うえー……、しょっぱい。こんなもん、飲めたもんじゃないわよ。塩水に色を付けたって感じ。

「何よお、これ？」

「まあ、いわゆる大当たりって奴だな。」

「大当たり？」

なにが大当たりよ。人にこんな変な物飲ませておいて。どっちかというとな大外れの間違いじゃないの？

「次元管理官の間で流行っているのさ。何か決めることがある時は、グラスに注いだグリーンタイザー……、まあお酒の一種だが、それをみんなで飲むんだな。」

「それで、その中の一つだけにアクサンを入れるのさ。」

「アクサン？」

「あ、ああ、地球の塩化ナトリウムみたいなもんさ。」

途中からウインが補足してくれたけど、それとあたしがこの変な物を飲まされたのとどういう関係があるのかが分からない。

「で、当たった奴は幸運を得ることになっているのさ。この場はおまえさんが当たった訳だから、まずは俺達が見張り役で寝ずの番をすることになり、おまえさんは上の部屋に行ってベッドで休むって訳だ。」

「へっ？」

「ここの2階にベッドルームがあるからさ。そこで少し睡眠をとった方がいい。お宅はまだこの衛星の時間に身体が慣れていないんだから。」

あ、ああ、やっと意味が分かった。あたしにベッドを譲るためにわざわざこんな回りくどいことをしてくれたってことね。実際、身体はクタクタだったし、普段なら文句の一つも言うところなんだけど、今回だけはせっかくの好意を素直に受け取ることにした。

また迷子になったらどうしようという心配をよそに、今回は教えてもらった階段を上がって正面のドアを開けると真新しいシーツに取り替えられたベッドがそこにあった。何も考えずにそのままベッドに倒れこむ。疲れている身体に反して、いろいろなことがありすぎたせいか簡単には眠れそうにはない。おかげであれこれと余計なことを頭の中で考えてしまう。

一番不安なのは、この世界であたしの能力がどこまで使えるのが分からないということ。能力の存在は感じるができる。事実、グランシーノスさんの車を停める時は普通に能力が発動していた。でも、誰かの心の中を覗こうとしても、未だ誰の心の中も見ることができていない。それがウインだけが特別なのか、この衛星の人達全員に言えることなのか、その辺がはっきりとしないところだったりする。そう言えば、パウダーの意識も読めなかった。

いくら考えても答えなんか出てきやしないのに、グルグルと同じところを回り続けているような感覚。いや、違う！誰かに意識的に考えさせられている？いつの間にかに第三者の意思を感じ始めていた。抵抗しようとした途端、その力が急に大きくなる。見たこともない幾何学模様があたしの身体を包み込む。なぜか、あたしの身体が宙に浮く姿が見える。

男性的でもものすごく強い力を感じる。あたしに何かを伝えようとしているの？

「キャあ…、あああ…！」

あたし自身が予想もしなかった悲鳴が部屋に響き渡る。その瞬間、意識が自分の身体に戻った。今のはいったい何だったの？

「おい、レイコ、どうした、開けろ、開けてくれ！」

ドアの向こうでパウダーが叫んでいるのが聞こえる。莫迦みたいにドアをノックしている。悪いけど少しだけ考える時間が欲しい。もうちょっとだけ、そのままノックしててね。

さあて、この次元層に来てから初めてこんなに強い意志に出会った気がする。たぶん男性…、なんとなく年配のような気がする。この意識の正体を確かめることができれば、あたしがずっと抱いている違和感の理由ももしかしたら分かるかもしれない。

「パウダー、鍵はないのか？この部屋の鍵。」

あーあ、ウインまで一緒になって、何やってんだらうね。あの二人は…。

「その必要はないわよ。初めからそのドアには鍵なんてかかってないんだから。」

突然、ドアの外のドタバタが収まって、決まり悪そうな二人がそーっとドアを開けて部屋に入ってきた。

「もともこのドアに鍵なんてかからないんじゃないの？」

「そ、そうだったみたいだな。いや、お宅の悲鳴が聞こえたもんでね。」

ウインが本当にホッとした表情を見せる。

「いったい、どうしたっていうの？」

「どうしたのかはこっちが訊きたいね。まさか…。」

「おい、パウダー！」

ん？パウダーが何かを言いかけようとして、慌ててウインが制止した。

「ちょっと、言いかけといてやめるなんてずるいわよ。」

どうやらウインは何かあたしに隠しておきたいことがあるようね。

「ずるいかどうかは別として、お宅の悲鳴が聞こえたから心配したのさ。何かあったんだろ？」

「寝ぼけたのよ。まあ、ちょっとしたホームシックってところ。心配させたのは悪かったけどね。それより、パウダーは何を言いかけたの？」

「さあな、きっとパウダーも寝ぼけたんだろ。何もなかったんなら何よりだ。おい、パウダー、続きをやるぞ。」

あたしが何かを言い返す間も与えず、ウインはすぐに部屋から出て行ってしまった。あとには出ていくタイミングを逃したパウダーが立ち尽くしている。で、あたしと目が合ってしまうと、ちょっとうろたえてニヤッとひきつった笑顔を作る。

「悪いな、この件については触れられたくないらしいな。悪いけど、おまえさんもこれ以上は追及しないでくれよ。じゃあな…。」

あたふたとパウダーもウインの後を追って部屋を出ていった。これで、またあたし一人になった。



考えることは十分すぎるほどある。そして、考える時間も・・・。

A C TⅣ 「パウダーの床屋さん」

S60. 3. JUN <<H20. 13. APR>>

## ACTV 「血の鎖」

翌日、起きてみると…と、まだ翌日じゃなかった。ま、いいわ。とにかく、あたしが目覚めてみると、パウダーとウインはしっかりと酔いつぶれていた。ま、久しぶりに会った気持ちも分からんでも訳じゃないけど、今の状況も考えて欲しいわね。

そこら中に散らかっている酒ビンやグラスを片付け始めて、ふとウインの顔を見てドキッとしてしまった。ウインの額には、まるで真っ赤なインクでスタンプでも押したかのように、二重星に鳥の羽をあしらったマークが浮き上がっていた。もちろん、昨日まではそんなマークはなかったし、どうすると出てくるのか分からないけど、もしかするとこの世界では普通なのかもしれないわね。

あたしの推測が正しいのかどうかは分からないけど、パウダーの額にも同じようなマークが浮き上がっている。こっちは何かの獣をデザイン化したような感じ。

いったい、どういう意味なのかしら？

あたしはできるだけ静かにゴミを片付けると、まずはきれいになった部屋で心を落ち着かせた。とりあえずこの二人を起こして訊いてみたいという気もあるんだけど、彼らにとってはまだ夜中だし素直に起きてくれるかどうか…。

しかし、どちらかという、あたしはこの二人が眠っている間にあることを試したかった。ここまでウインもパウダーもいくらあたしが意識しても、どうしても彼らの思考は読めなかった。でも、それが寝ている時だったらどうなるのか、一度試したいと思っていたの。ただ、今まではそれをやるチャンスはなかったから、こんな絶好のタイミングを逃したら二度と試せないと思ったの。

あたしは心の中にフェリアとジュールを思い起こした。そして、意識を二人に集中する。

「いけないなあ、そういうのってプライバシーの侵害って言うんだよ。」

えっ？

「それに無駄な努力っていうもんだ。」

二人とも寝ているとばかり思っていたのに、いつの間にか…。

「どうやら、お客さんの到来らしいぜ。」

「まあ、時間の問題だったからね。」

「ちょっと、怒ったんじゃないの？」

怒られると思ってんのに、話しが微妙にかみ合っていない。お客さんって誰のこと？話しが見えないことへの不快感はあるし、なんでこの二人にはあたしの能力が通じないのか納得できないし。

「怒るのは後回し。ちょっと厄介なお客さん達を片付けてからね。」

ウインはニコッと笑ってパウダーに目配せをして頷く。パウダーはどこから出してきたのか、手にスッポリと収まるような小型の銃を取り出してきてウインにその一つを渡した。

「行くぜ！」

「はいよ。」

あたしに質問する間も与えずに二人は飛び出してってしまった。

あたしは一人ポーンとしていた。少なくともあたしの能力が弱まっているとかではないことは確かだ、どちらかというこの世界の人達にあたしの能力が通じない可能性のほうが強いことに気づいた。彼らは誰かが近づいてきていることに気づき、あたしは未だに何が起きているのかすら理解できていない。ぼんやりと彼らが出ていったドアを眺めていて、少しずつある思考が近づいてきて

いることに気づいた。彼らが察知したのはたぶんこの思考だったんだ。

武装しているだろう軍隊が10人…いや20人は近づいてくる。個々の思考というより、ある一つの意思を持った固まりとしてなら認識できるが、それ以上は漠然としてしまってそこが限界であることが分かる。でも、状況からすれば、たぶんこの家を囲むようにしているのはバライナ軍よね。だったら、あたしにだって手伝わせてくれたっていいのに…。

あたしは静かに目をつぶると家の周囲の様子を確認してみた。夜中ということもあるのか、通りにはこのバライナ軍の他には人は誰もいない。約200メートルほど離れた場所にポイントを決めると、あまりやりたくはないけど短距離転移を試みる。今回は座標が正確だったこともあって物音一つ無しに転移することに成功。そのまま何食わぬ顔でパウダーのお店の方に歩いていった。

いるいる、銃を構えた兵士が店の前に10名ほど。その他、隠れてはいるけどさらに10名が周囲に潜んでいる。ここまで来て気づいたけど、近所の人もこの異様な雰囲気気がついてはいるみたい。みんな、この様子を見ているんだろうけど、それぞれ窓をきっちり閉めて巻き添えを食わないようにしているみたい。

「そこの娘、邪魔だ。さっさとどこかへ行け。」

隠れている訳じゃなかったけど、目ざとい兵士にさっそく見つかった。

「ねえ、何してんの？」

不本意ながら何も分かってない振りをするのが無難かな？

「ええい、おまえには関係ないことだ。俺達を怒らせないうちにさっさと行け！」

「ねえねえ、何か楽しいことでも始まるの？」

そのままその兵士の腕を掴んで、周囲にはふざけているように見せかけた。

「やめろ、ええい、離さんか。」

この人にはあたしの能力が通用するといいいけどね。念のため腕を掴んだのも暗示をかけやすくするため。

「ねえ、話してよ。」

「わ、分かった。話してやるからおとなしくするんだぞ。」

「うん。」

とりあえずは暗示が効いたのかな？

「この中にな、次元管理官が2人いるのさ。俺達はべつに次元管理官なんて関係ないんだが、そのうちの片割れがアクサリ家の王子ともなれば話は別だ。我がバライナ家にとって、アクサリ家の血は一滴たりとも残しておく訳にはいかないんでね。」

「殺しちゃうの？」

「いずれはな。まあ、今は掴まえろいう命令しか受け取っていないが、最終的には王子にもラムダ王の後を追っていただくさ。」

「ラムダ王？ラムダ王って、王様、死んじゃったの？」

「なあんだ、知らなかったのか。まあ、いいさ。さあ、早く邪魔にならんうちに…、うわああ！」

死んだ…、ラムダ王が…。ウインのお父さんが、なんで…。せっかく、ウインが会いに来たというのに…。

気がつくと兵士は10メートルくらい吹き飛んでいた。周りの兵士がそれに気がついて一斉に銃口をこっちに向ける。だが、その銃もすぐに役に立たないことになった。兵士が銃の引き鉄を引く

より早く、あたしが片っ端から壊していたから。次の瞬間にはそこにいた兵士は次々と空中を飛び交い、ある者は他の者にぶつかり、運の悪い者は頭から地面に落下し、またある者は我先にと逃げ出した。

「引けえ、引くんだ！」

そう叫んだ隊長さんらしき人も、いきなり空中を飛んだかと思うと、逃げ出していた兵士の上にドサッと落ちてそのまま気絶してしまった。周囲にいた兵士達はその隊長さんを担ぎ上げると、あっという間に退却してしまった。

あたしの周囲にはまた静けさが戻り、近所の家からは隠れてこの様子を見ていた人々が恐る恐る出てきてあたしを見ている。一気に能力を使ったせいか、身体中の力が抜けたみたいになる。立っているのもつらい。膝を折って地面に倒れる…と思った瞬間、背後から腕が伸びてきて力強くあたしの身体を支えてくれた。

「まったく、無茶しやがって。」

あ、ウイン…。ウインがあたしのことを抱きかかえる。

「だって、だって…。」

涙が溢れてくる。ウインの顔が滲んでくる。どうしようもない感情。

「まったく…。」

ウインが苦笑して何かを言いかける。それをパウダーが肩をすくめて首を横に振った。

この街の人々はあたし達を囲んで歓声をあげている。彼らにとっては、単に兵隊を追い返しただけの出来事に違いない。彼らはきっとまだ知らない。王様がこの世を去ったことなど気がついてもない筈だから。だから、この人達を不幸な気分させちゃいけないんだ。

「ん、あ、ありがと。もう大丈夫。」

涙を拭きながらウインの顔をジッと見上げる。

「べつに泣く程のこととも思えんがね。」

「パウダー、それはどういう意味よ。」

「だってなあ、たかが兵士を20人ばかり投げ飛ばしたところで、あんたのその肩書きが変わると思えんし。まあ、ウインの腕の中が居心地いいというのは否定せんが。」

「パウダー！」

パウダーったら、ニヤッと笑ってさっさと家の中に入ってしまった。もしかして、これでもあたしを元気づけているつもりなのかしら。

人々もどうやら自分達の目の前にいる人物がウイン王子だということに気が付いたらしく、少々騒ぎ始めた。ウインはそういうのっておおよそ大の苦手なので、真っ赤な顔をしてそそくさとパウダーの家に戻ってしまった。ただ、ちょっと気にかかることには、ウインに向けて人々が叫んでいた言葉。

「ラムダ王、万歳！」

単にアクサリ家へに向けた言葉なのか、それともラムダ王が死んだことを知っていて、後継者であるウインとして分かっているのか、あたしにはどうしてもそれが分からなかった。

あたしがウインの後を追って家に入ろうとすると、人々もそれを待っていたかのようにそれぞれの家に帰っていく。たった今の騒動なんてなかったように普通に…。なんか、まだまだあたしの知らない秘密がこの衛星にはあるとしか思えない。

「これでのんびりと構えている余裕はなくなったな。」

「はなっからそんな余裕はなかったさ。俺が欲しかったのは情報だよ。」

「で、何が分かったのかしら？」

「え……。」

いい加減、ウインの手のうちを見せてもらってもいいんじゃないかな。ウインが単なる理由で王位を継ぎたくないって言っているんじゃないことは初めから分かっていること。あたしがウインの猿芝居につきあってあげているのも、本当はウインの本心を知りたかったから。

「お宅が何かを探っていてこんなお芝居をしていたのは分かっていたわ。でも、そろそろ本当のことを話してくれてもいいんじゃない？」

ウインの額に真っ赤な紋章が浮かび上がる。と、同時に心なしか顔つきまで変わったような気がする。

「きちんとお話ししなくてはならないようですね。まあ、これも計画のうち。敵を欺くにはまず味方からという言葉もあることですし、不快な気分にならせたことはお詫びするにしても、どうかご理解をお願いします。」

あらら、顔つきだけじゃなくて口調まで変わってしまったわ。あたしが知っているウインとは別人と言ってもいいかもしれない。どこにもウインらしさを感じない。

「あのお……、莫迦な質問かもしれないけど、あなた、本当にウインなの？」

本当に莫迦な質問だわ。真っ赤になって俯いたあたしに、ニヤニヤ笑いのパウダーが変わりに答えてくれる。

「これが本当のウイン・アクサリ・ラムダさ。」

「本当の？」

「つまり、ウインには2種類の人格があって、次元管理官でいる時のウインと、王子としてのウインは別物なのさ。ほれ、その額の紋章が王子としてのウインが表に出ている証拠だよ。」

「この星の人はみんなそうなの？」

「こういう性質を持っているのは、正確には公家の血筋の者だけだがね。」

「ということは、パウダーも公家の血筋なの？」

「やっぱり見られていたか。うちはアクサリ家とは遠い親戚なんだ。紋章が浮かび上がるのはその名残なんだろうが、長い年月の間に他の血が混ざってしまいアクサリ家のような能力は何も持っていないさ。」

ふーん、なんだか分かったような分からないような話しね。今のこの真面目な雰囲気ウインが本来の王子としてのウインで、普段の軽薄そのものって感じのウインはもう一つの人格ってことが納得できなきゃ、あたしの疑問は解けないことになるんだけど、それにしてもあまりの落差に俄かには信じがたいというのも事実。

「まあ、急に信じろとは言わないさ。だが、おまえさんもまだここにいる気なら早く慣れたほうがいい。」

最後の“慣れたほうがいい。”の部分で、パウダーの感情がまじになっているのが分かる。あたしは改めてウインの顔を見入ってしまった。

「レイコさん、我がアクサリ家の血の鎖を断ち切るために、あなたの能力を貸しては貰えませんか？」

「血の鎖？」

「そうです。アクサリ家の歴史は血の歴史。そして、それはそのままラムダ王国の歴史でもあるのです。」

パウダーがスーッと下がって一礼すると部屋を出ていく。その仕草は王家に仕える家来のようにも見える。

「今は無くなった我われの故郷でもある惑星ラムダのことを話さねばならないでしょう。そこがすべての始まりでもあり、今もなお続いているこの騒動の原因でもあるのですから。」

こうして、ウインは長い長い惑星ラムダの歴史をあたしに話してくれた。

A C T V 「血の鎖」

S60. 28. DEC <<H20. 19. APR>>